

ペットペットペット スピンオフ—サンプル—

1

「ちゃんと洗ったか？」

「あら、い、ました……」

「出せ」

痛いから嫌。怖い——。

でも殴られる方が怖い。シャワーの後、体を拭いただけの状態で床に座って大きく足を開く。小山田が歩斗(あゆと)の正面に膝をついた。

「あ……あ……」

怖い、怖い——。

「ツくあ！」

伸びてきた手が陰囊を鷲掴みした。中身が潰れるような痛みに思わず目をつぶった瞬間、さらなる鋭い痛みに襲われる。

ツプツ。

「——！」

口を両手で押さえ、悲鳴をこらえる。冷たい液体が中に入ってくる——。

「ううう……」

痛い。とても痛い。なのに冷たく感じていた薬剤が熱を持ち、ペニスがぐんと起ち上がる。

「淫乱だな」小山田が鼻で笑う。

違う。今打たれた薬のせいだ——。

「はあっ……」

「ほら、行くぞ。さっさと歩け！」

ぐいっと強く引かれたリード。首輪が顎に引っ掛かって痛い。でも早く——早く出したい。気持ちよくなりたいたい。

頭の中はもう、射精することしか考えられなくなっていた。

「ひああっ！」

「元気な牛さんだね」

「出しても出しても満足できないんですよ」

小山田が仕事用の明るい声を出す。それに客も楽しげに言葉を返して……でもおしゃべりなんてしていないで、もっと扱って気持ちよくさせてほしい。

「もしお時間があるなら最後まで搾ってみませんか？」

「ああ、そうしよう。味の変化も楽しませてもらうよ」

「ひぎいいい！」

陰囊を握られ、潰すように強く揉まれる。感じているのは痛みなのに、なぜか勃起はさらに硬さを増していく。

「素晴らしい牛だね」

「もしよかったらしっぽもいじってやってください」

「え、でも——」

「しっぽ、ですよ。この子はしっぽも敏感なので」

「ああ、ああ、そうか。かわいいね、どれ……」

「んああっ！」

客が突然、牛のしっぽがついたデイルドをぐりと回した。

見えないところから突然アナルをいじられる快感。しびれるような刺激に頭が真っ白になっていく。

「ああっ！ ああっ！」

「本当にエッチな牛さんだ。ミルクを出すのが大好きなんだね」

「あっ、アアアッ！」

「ほら、牛はなんて鳴くんだ？」

小山田に乳首をぎゅっつつねられた。痛みで一瞬、我に返る。

「あっ、もっ！ モオオ！」

「ああ、かわいいね。ほら、お乳を出して」

「モオッ！ モオッ！ モオオオオ……！！」

今日、いったい何度出しただろう。こすられすぎたペニス痛いのに、まるでこれまでの射精なんてなかったかのようにペニスはいつまでも硬いままだった。

「おら！ 早くしろ！」

「あ……あ……」

仕事前に打たれた薬が抜けても、客はどんどんやってきた。客の途切れた一瞬の隙に再度注射を打たれ、なじませるように陰囊を揉まれると理性がなくなり、尻を振って客を求めた。何度も、何度も。最後は体に力が入らなくなり、藁の上に崩れ落ちたところで終了となった。

「おい！ おせえぞ！ 牛！」

「あ……ごしゅ……」

牛舎のブースから控室までが遠すぎる。腕にも足にも力が入らないどころか、エネルギーを使い果たしたようで震えている。

「チツ！ 使えねえ牛だな！」

小山田が握っていたリードを床に叩きつけた。

毛の長い絨毯が敷かれているので音はしないけれど、次はその手を自分に向けられるのではないかと思うと怖くて、無意識のうちに体を丸めた。

（痛いのだっ……もうやだあ……）

殴られるのも、蹴られるのも、注射を打たれるのも、無理矢理射精させられるのも。全部嫌だ。怖い。でも、ここを辞めたら生活ができなくなってしまう——。

（でも……あれ……？）

しばらく経っても想像していた痛みはやってこず、腕の隙間から小山田の方を覗き見ると、遠ざ

かる足がドアの奥に消えるところだった。

バン！ と強い音を立ててドアが閉められた。少しだけほっとする。でもまだここから部屋に戻らないといけない。そして中に入れば鍵をかける——昨日のことを思い出すだけで痛い。怖い。苦しい。つらい。

でも歩斗が就職先を見つけられなかったのだから仕方ない。

小山田と知り合ったのは、意識が朦朧としそうなほど暑い日だった。梅雨入り直前で湿気がひどく、汗だくになりながら公園で無料の求人雑誌を見ていた時、「もし仕事探してるなら、うちでアルバイトしない？」と声を掛けられたのだ。

その三か月前に大学を卒業していた歩斗は親に就職したと嘘をついてしまっていたので、二つ返事で小山田の誘いに頷いた。滞納してしまったアパートの家賃も早く払わなければならなかったし、何よりお腹いっぱいご飯を食べたかったのだ。

それが二年半前の出来事だった。風俗という仕事に不安がないわけではなかったけれど、給料の高さに惹かれてしまった。でも長く続けてはいけな思っていたので、牛として働いて生活費を稼ぎ、休日に正社員の仕事を探そう——最初はそう思っていた。

でも週五で限界まで精液を搾り取られると休みの日は一日中家でぐったりしてしまい、どうして

も外へ行くことができなかった。

それになんとか家賃は払えるようになったものの余裕はなく、公共料金と少しの食費でほとんどゼロになってしまったので、給料日の前には公園で水を飲んだり半額になったもやしを買ったり……そうやって日々をやり過ごすことしかできなかった。

(つらい……疲れた……)

あと五メートル。ふるふるする腕に力を入れ、絨毯の上を這って進む。あと少し……たどり着いたら殴られると思うと怖かったけれど、それでも進む以外の道を知らなかった。

2

「悪い、能代(のしろ)。これ掃除担当の松本に渡してきてくれ」

「はい」

施設長の沢口から書類を受け取り事務室を出る。さつき小山田と歩斗のペアが仕事を終えたところなので、松本は牛舎にいるだろう。

どちらから行こうか、なんて考えるまでもなかった。事務棟から牛舎へは一度外に出た方が早い、この寒さだ。絶対に外には出たくない。少し遠回りになるが、建物の奥にある廊下から牛舎に入った。

むっとした精液の匂いが鼻につく。しかしそれに興奮したのは入社から一か月の間だけだった。今では精液を搾り取られた牛の体調ばかりが気にかかる。

想像していたとおり、松本は小山田と歩斗のブースにいた。

「お疲れさま」

「お、能代さん。どうしたの？」

「これ、施設長から」

「ああ、ありがとう。――あのさ」松本が声を落とす。

「どうした？」能代も一歩、松本に近づく。

「歩斗くん、大丈夫かな」

「大丈夫って？」

「これ、血じゃないかなと思って」

「は？」

松本が指したブースの端には一握りの糞がよけられていた。しゃがんで手に取ってみる。数本、赤く染まった部分があった。でもほんのわずかだ。おそらく松本でなければ見逃していただろう。

「ここ終わったら施設長のところに持って行くかと思っただけだ……事務所に報告は？」

「ない」

「シャワーの後に医務室の申請かな」

「二人に変わった様子は？」

万が一の時のため、牛とパートナーがブースを

出るのは掃除担当者が来てからと決まっている。そこで問題がないことを確認してから控室に戻るのだ。

「問題ないって言われたんだけど、歩斗くんはいつもぐったりしてて、答えるのは毎回小山田さんなんだよな……でもそれってよくあることだから」

松本の言うとおりだ。ちよつとしたお小遣い稼ぎにきている子以外は短時間のうちに繰り返し精力を搾られ、疲れて話す体力も残っていないことが多い。だから代わりにパートナーが答えるのだが……なんとなく胸騒ぎがした。

「ちよつと様子見てくる」

「俺も早めに施設長のところ行くから」

「頼む」

ブースを飛び出し控室に向かう。歩斗たちの控室は二階だ。二段抜かしで階段を駆け上がると、廊下に白いものが見えた。

「どうした！ 大丈夫か！」

一糸まとわぬ姿。うつぶせの体を抱き起こすと歩斗だった。しかし周りにパートナーである小山田の姿はない。誰か助けを呼びに行ったのだろうか。能代が携帯を取り出した時、近くのドアが開いた。

「おせえぞ！ 牛！」

(……は?)

驚きのあまり声が出なかった。廊下に誰もいな

いと思っただけならいい小山田は、能代の顔を見るやいなやハツとした様子でドアを閉める。

「っ、おい！」

明らかに虐待だった。牛役を牛と呼ぶことも禁止されているし、歩けないのであれば抱き上げてやるのが普通だろう。

すぐさま施設長の携帯に電話をかける。誰が出るかわからない事務所ではなく携帯にかけることで、緊急事態と判断されるのだ。沢口はすぐに出た。

『どうした！』

「現在二階廊下、控室前。部屋にいる小山田の確保をお願いします。それから空き部屋の鍵も」

了解という声とともに電話が切れた。急いで歩斗の様子を確認する。

「歩斗くん、歩斗くん」

「あ……」

意識はある。しかし目が虚ろだ。

「小山田と付き合ってるわけじゃないよね？」

念のためと思いつつ訊いた言葉に、歩斗が怯えた表情で力なく頷いた。その後で口を開いたが、声は出ない。

「もう大丈夫だから……」

体の様子も心配だったが、今の状況では安心してやるのが先決のように思えた。こんなところ裸で放置され、あんな暴言まで吐かれて怯え

ていないはずがない。

「汗臭かったらごめん」

背広を脱いで歩斗に掛ける。その時いくつかあざのようなものが目に入った。

「……少しだけ我慢してな」

きつとこれまで散々つらい思いに耐えてきたのだろう。そんな彼に我慢してと言うのは心苦しかったが、おそらくあと数秒だ。

「首輪、外すよ？」

息苦しかったのか、歩斗は「はう……」と安堵のため息を漏らして頷いた。きついそれを、首が締まらないよう慎重に外す。覗き込むと、首輪が触れていた辺りの皮膚がこすれて赤くなってしまうていた。

「能代！」

足音とともに聞こえてきた呼び声。顔を上げると沢口が腕を振りかぶった。手から小さなものが放り出される。さすが元ピッチャー。鍵は能代の手にすぼっと収まった。

「奴は出て来てません！」

「了解！」

沢口が小山田の部屋に突入するのを見てから、鍵に書かれた部屋番号を確認する。

(つてこれ……)

見覚えのある番号。沢口も焦っていたのだろうが——投げ渡された鍵は新井と春太の部屋のマス

ターキーだった。

(…：仕方ないか)

事情を話せばわかってくれる奴らだ。事務所に行けば空き部屋の鍵は手に入るが、そこに歩斗を連れて行くことも、ここに置いていくことも憚られた。

(そういえばあいつらはもう帰ったのか?)

今日は春太の出勤日だ。明日は休みなので早々に帰宅してイチヤついているのかもしれない。ひとまず鍵をポケットにしまい、歩斗をそつと抱き上げる。

「あっ…：…」

「大丈夫。もう怖い思いはさせないから」

確実に小山田は異動になる。そしたら歩斗のパートナーを見つげるところから始まるが…：この怯えようだと、もう仕事を辞めたいと思っているかもしれない。それでもケアをするまでが自分たちの仕事だ。退職を選んだとしても、元気になつて次の仕事を探そうと思えるようになるまでは責任がある。

「新井、いるか」

念のため声を掛けてからノックする。これで返事がなければ鍵を使って入ってしまったおう。事情なんて後から話せばいいだけだ。そう思った時、内側からドアが開いた

「どうした？」

新井の奥に、ソファに座る春太の姿が見えた。服装が乱れている。どうやら邪魔をしてしまったようだ。しかし今はこちらを優先させてもらおう。

「悪い、ちよつと——」

能代が言いかけた時、新井の視線が歩斗に落ちた。

「入れ」

新井がドアを広く開けた。能代が中に入ると、新井がすぐに鍵をかける。その音に歩斗が不安そうな表情を浮かべたが、これは襲撃から守るためだ。

くくく

「歩斗くん、お洋服脱ごうか」

「あ……はい」

看護師の手を借りながら全裸になる。目をつぶり、シーツを握って羞恥に耐える。

「打撲が多いね……殴られちゃった？」

医師がそっと肌に触れた。怪我は肩や腕——客からは見えにくい上半身が多かった。

「殴るより蹴る方が多かったです」

たぶん手だと小山田が痛いから。「牛なんだから四つん這いだろう」と言って、一緒にいる間はほとんど立つことを許されず、足蹴にされるが多かった。

「クソ……」

能代が怖い顔をした。でも目が合うと優しい表情に変わる。

「たくさん叱っておくから」

「あ……」

ということとは、やっぱりこれからも小山田と一緒に仕事をしなければならぬのだ。でも社会人なんだから我慢しないといけない……頭ではわかっていた。それに仕事をしないとみんなに迷惑をかけるし、収入がなければ自分が一番困ることになる。

はい、と返事をしようとして口を開きかけた時、タバタと人が走る音が聞こえた。小山田が来たのかもしれないと思ったら身がすくんだ。しかし直後に「歩斗くん」と知らない声に呼ばれる。

「ここですよ」

能代がわずかにカーテンを開けた。男性はなぜか入っては来ず、カーテンの隙間から能代と話す。

「歩斗くん、どう？」

「今診てもらってるところです」

「施設長」

医師が低い声を出した。それで、声の主が施設長だとわかる。

「はい」

「後でじっくり話をするか」医師がドスの効いた声で言う。

「あ、ああ、もちろん。それで——」

「歩斗くん、施設長もここに入っていいかな」

まるで別人のような甘い声で医師が言った。当然断るわけにもいかず、「はい」と答える。当

「施設長、どうぞ」

「どうも——歩斗くん、気分は？」

「あ、はい……」

大丈夫、と言うのは嘘のような気がした。かといつて今のこの心境をどう言葉にしたらいいのかわからない。

黙っていると、医師が歩斗の肩に触れた。

「普段から蹴られてたみたい。上半身だけでアザが五か所。乳首周りも紫色になってる——これはたぶんつねられてたね？」

最後の言葉は歩斗に向けられていた。つねられたのか愛撫の一環だったのかはわからず、曖昧に頷く。だって痛かったけれど、それで射精したことは何度もあったから。

「おちんちんとかお尻の方も見せてね」

「あ……」

もじもじと足を擦り寄せる。でも痛いものだから診てもらった方がきつと楽になる。足から力を抜くと、柔らかいペニスを医師が優しくつまんだ。

「こすられすぎかな……切れる。お薬塗っておくね」

しみたらどうしようと思ったけれど、少しも痛

くない薬だった。ほっとすると同時に体から力が抜ける。しかしそれも一瞬だった。陰囊を持たれた瞬間、鋭い痛みが走った。

「っ……」

癖で口を手で覆った。歯を食いしばり、悲鳴をこらえる。

「痛いのに」

医師はすぐに手を離れた。けれど足を開かれ、すぐ近くからそこを見られる。

(あ……)

みんなの視線が陰部に集中していて恥ずかしい。でも誰一人いやらしい目はしていない。

「腫れてるね……。いつから痛い？ 痛む心当たりはある？」

医師がぐつと頭を下げて覗き込む。

歩斗がひどく痛がったので、角度を変えて見ることしかできないのだろう。でも触っていいです、とは言えなかった。

「薬、が……」

「薬？」

ベッドを囲む全員が訝しげな表情で歩斗を見下ろした。

「あの、注射のやつ……です」

「注射のやつって？」

「え……？」

「どんなものだったか、わかる？ どんな時に、

どれくらい打たれた？ 注射の後、何か変わった？」

医師に矢継ぎ早に問われ、一瞬間の中が真っ白になる。みんな使っているものなんじゃないのか。慌ててその時のことを思い出す。

「あ……えっと……仕事の前、シャワーの後に、その……タマ、に……」

恥ずかしい。でも誰一人笑ったり、にやついたりはしなかった。むしろ明らかに顔つきが陰しくなっていく。

「それで？」

一番真剣な顔をしていたのは医師だった。怖かったので、あまり見ないように、さりげなく視線を外してから続ける。

「冷たい感じがして、薬が入ってきて……その後揉まれて、痛いんですけどすぐ熱くなってきました……」

勃起して、射精がしたくなります、というのは小声で言った。

「使われたのは仕事の前だけ？」

「あ、えっと……」

最初は一日に一回だけだった。でも最近はいく日でも三回打たれていた。つらかったけれど、それをすれば何度でも射精ができて……その分収入が少し増えた。

金銭のことだけを隠して言うと、重苦しい沈黙

が部屋に降った。何かまずいことを言ってしまったのだろうか……。けれど能代だけは目が合うと優しく笑いかけてくれた。

「話してくれてありがとう。他には？ 何かある？」

「あ……えつと……」

何をどう話したらいいかわからなかった。けれど少なくとも薬については他に話すことはなかった。それだけです、と言って口を閉ざす。

突然、医師がハッと我に返った様子で施設長を振り返った。

「施設長！ すぐ確認！」

くくく

「ゲームは楽しかった？」

能代がスーツから部屋着に着替えてリビングに入ってきた。まだ部屋は少し寒い。そのためかブランケットを持ってきてくれた。札を言って足に掛ける。

「はい。とつても」

「ずっと動物を追いかけてたの？」

「まあ……たぶん半分くらいは」

素直に答えると能代は声を上げて笑った。その遠慮のない様子に安心する。

「そっか」

「もうちよつとうまく囲えるように——あ」

「ん？」

「いえ、我ながら下手くそだったなって」

飼育動物は柵で囲う。逃げ出さないように閉じ込める。それでもし勝手に逃げれば捕まえるまでどこまでも追いかける——でも小山田はそこまで執着するだろうか。たぶんそこまで思われてはいなかったはずだ。だから大丈夫——。

もしかしたら牛を飼うということが気になって、春太はあのゲームを避けようと裏返しにしていたのかもしれない。

（たくさん気を遣わせて悪いことしちゃったな）

本当にとってもいいこだった。また遊びたい。

「ゲームなんて最初はみんな下手だと思うよ」

「そうですね。逃げた子を追いかけながら、動物を飼うって大変だなって思いました」

「……そうだね」

能代の同意に、胸がツキンと鋭く痛んだ。でもこれも被害妄想だ。小山田は仕事上の飼い主であってプライベートでは何の関係もない。本当に飼われていたわけではないのだから、大切にする責任なんて彼にはなかった。

「俺だったらこれでもか！　ってくらいかわいがるんだけどな」

「え？」

「かわいがりすぎてウザがられそうなくらい」

「あ……はは、そうですね。そんな感じがします」
きつとすぐくかわいがって、大切に大切にする
のだろう。何でも甘やかして、暇さえあれば体中
を撫でまわして。

「ペットが泣きそうだったら落ち着くまで抱きし
めるし、不安が消えるまで離さない」

「……能代さんのペットになる子は幸せですね」
でもきつとその分、能代が仕事に行ってしまう
時間が寂しくてたまらなくなるだろう。一日中能
代のことだけを考えて、寂しさと戦いながら過ご
すことになる。

「……そうかな」

「はい」

笑顔を作る。だって今悲しい顔をすれば、優し
い能代はきつと気を遣う。

「歩斗くんは……もう動物は嫌？」

「え……あ、よくわかりません。僕には牛の仕事
しかできないし……でも僕には——」

飼い主がいらないと言えば、じゃあ小山田を戻そ
うと言われるかもしれない。でもそれは嫌だった。
かといって他の人じゃなきゃ無理だなんてわがま
まは言えない。

「でも？」

「いえ、何でもありません」

「……牛さんの仕事は大変だよね」

はいと言っていいのだろうか。だって飼い主や

事務の人の方がよほど大変だ。世間一般の仕事と比べても、牛なんてただ裸で四つん這いになっているだけだ。ただちよつと痛かったり苦しかったりするだけで……最初は気持ちいいし、精液をおいしいと言われれば嬉しいとも思う。だからそれを大変と表現するのは失礼なような気がした。

「……歩斗くんは何がよかった？」

「え？」

「仕事中、こうだったらいいのって思うことはなかった？」

「よく……わかりません」

何がつらかったのか、今になるとよくわからない。頭の中に霧がかかっているみたい。

俯き、柔らかなブランケットを優しく握る。

「……歩斗くんは普段はあまりゲームはしないの？」

「え？ あ、実家にもなかったですし、ゲームなんて買う余裕がなくて、持っていないんです」

突然の話題の転換。また気を遣わせてしまったことに申し訳なくなる。

「……余裕がない？」能代が眉をひそめた。「立ち入ったことを訊くようだけど、借金とか？」

「いえ！ それはないんですけど……毎月ぎりぎりです」

「仕送りをしてるとか？」

「いえ……？」

春太も歩斗がギリギリだと言うと思議そんな顔をしていた。みんなそんなに稼ぎがいいのだろうか。

「浪費癖がある？ ギャンブルが好きとか」

「したことないです。アパートの家賃が五万円と、あとは普通に水道とかそういう生活費だけですけど」

「それでギリギリ？」

「はい。無駄遣いはしてないと思うんですけど……服とかもほとんど買わないですし」

それとも使い方が荒いのだろうか。肉はすべて外国産だし、週に一度の特売でしか買っていない。野菜は生か冷凍されたものか、その時に安い方を買う。パンは見切り品だし――。

「……さっきの話だけ」

しばし考え込んでいた能代が口を開いた。

「はい？」

「歩斗くんは一日にかなりたくさん精液を搾られていたよね」

「は、はい……」

それが仕事だ。そう思っていたのになぜか能代に言われると性的な気分になる。恥ずかしい。

「出勤日数は週に五日」

「はい」

「それでギリギリっていうのはどうしてだろう？ 給料の計算が間違ってたのかな」遠慮がちな言い

方だった。

「わかりません」

「明細の見方が難しかった？」

「明細を見たことがないです」

「見たことがない？」能代が眉間にしわを寄せた。

「その…それは飼育員の人が管理するんですよね」

能代のしわがさらに深くなる。

「給料は手渡しだった？ 振り込み？」

「手渡しです。もらってそのまま小山田さんに渡してました」

名前を出すのに少しだけ勇気が必要だった。でも今はちゃんと答えなきゃいけないところだとわかっていた。

「え、給料を？…渡すように言われたの？」

「はい。そこから手数料を計算するからって」

「手数料？」

「はい」

本当は牛が自分でしなきゃいけないところを小山田が代わりにしてくれると言っていた。だから小山田に渡して、戻ってきた分が給料だった。

それを言うと、能代は少し待っていてと言ってリビングから出て行った。

（もしかして言っちゃいけないことだったのかな…）

やっぱり自分でちゃんと計算しなきゃいけな

かったのかもしれない。それを小山田に任せていたから——怒られる。能代は優しい人だけれど、しつけは必要だと言って殴ったり蹴ったりするかもしれない。

ペットになりたての頃はみんなそうなんだと小山田は歩斗を蹴った後に言っていた。歩斗もしつけが終わればこんなことはされないんだよ——今日、訊けばよかった。せっかく春太と二人で話す機会があったのだから、いいペットになれるまでは新井にもたくさん殴られたのか尋ねてみれば——。

くくく

「よかった。胃薬が効いてきたらおちんちんの薬を塗り直そうね」

「あ……」

トクン、と胸が高鳴った。この感覚には覚えがあった。もう何年も前のことだけれど、部活の先輩に恋をした時と同じものだ。

(でも、そんな——)

能代とはまだ親しくもなっていないのに。

「恥ずかしい？」

「はい……」

これまで数えきれないほど多くの人に裸を見られ、ペニスを扱かれている。能代にだって廊下や

医務室で裸を見られているし、今朝も薬を塗ってもらった。なのに、これまで以上に緊張してしまふ。動悸が激しすぎて息苦しい。

「かわいい」

「あ……」

能代にかわいいと言われる度に体の熱が上がる。ペニスは痛いのに、いやらしい気分になってしまふ。

「ハア……」

「ん？」

「なんか……体が……」

意識してしまったせいだろうか。なんだかやけに体が熱い。ペニスに勝手に血が集まっていく。

(熱いっ……)

布団を剥ぎ、パジャマの胸元をくつろげる。

「副作用かな」

「え……?」

「症状が出るかも、ということは先生から聞いてたんだ。毎日強制的に薬で興奮させられていたから、体がそれに慣れちゃったんだよ」

「そんな……」

では能代にドキドキしたのもその作用の一つ、ということか。体の興奮と胸の高鳴りを混同してしまっていたのだ。

(そっか……それで……)

ほとんど昨日が初対面の相手だ。助けてもらっ

たとはいえ、こんなふうに胸が高鳴るのはおかしいと思っていた。

それにしても——薬のことを思い出したせいか、どんどん体温が上がり続けてしまつて苦しい。

楽になりたくて、ズボンに手を伸ばす。けれどそこに届く前に手首を握られてしまった。

「やっ……」

「ごめんね、苦しいね。でもまだおちんちん怪我してるから」

「やだっ」

楽になりたい。こすったら痛くなるとわかつていても射精したい。

「苦しいね」

「うう……」

すがるように抱きつくつと、能代も背中にも手を回してくれた。けれど体は楽になるどころかさらに快感を求めて高まつていく。

「ごめんね、少しだけ待ってて」

腕をトントンと叩かれ、仕方なく力を抜く。能代が腕の中からするりと抜け、ベッドには歩斗一人きりになった。

もう自分でしてしまおうか。恥ずかしいけれど、このまま苦しいよりはいい。そつとズボンに手を入れて下着の上から陰部を撫でる。

「あっ……」

下着と、包帯越し。たったそれだけの刺激でも

勝手に声が出てしまった。

「んっ……あ、は、あっん……」

強くすると傷が痛む。でも痛みに快感が上回る。

「あっ、はあ、あ、あっ……ん……」

気持ちいい。出したい。

直接触ろう、と下着に手をかけた時だった。

「歩斗くん」

「あっ……」

見られてしまった。でも今は恥ずかしさよりも射精したいという欲の方が強い。

「ごめんね」

「あっ！」

ズボンを脱がされた。もしかして、してもらえるのだろうか。能代に射精させられる——そう思っただけで興奮が高まる。しかし次の瞬間には我に返っていた。

「っ……!!」

「ごめんね」

痛みに近い冷たさがペニスを包んでいた。何事かとそちらを見ると、股間に氷のうが置かれている。

「あ……」

嘘。なんで。はしたなくねだりそうになる自分をこらえ、ぎゅっと目をつぶる。

「少しは落ち着いた？」

氷のうが外された。けれどまだペニスはじんじ

んと冷たさを引きずっている。

「はい……」

ペニスはしぼんだけれど、まだ気分は高まったままだった。強引に勃起だけを鎮められ、息苦しい。

「せめておちんちんの怪我だけでも治ったら、俺がしてあげるから」

「あ……」

それはすごく魅力的だった。でも今も射精したい。怪我なんて大したことはないのだから、少しくらい——。

「今のうちにお薬塗り直しちゃおうね」

「あっ！」

下着を下ろされ、咄嗟に手を伸ばしたけれど、隠す前に手首を掴まれてしまう。

「ごめん、ちよつと見せてね」

包帯を丁寧にはどかれる。その刺激だけでも勃起してしまえそうだ。

「……うん、昨日よりは少しよくなってるかな。

今日はお風呂に入っていいって言われてるから、夜にきれいに洗ってその時にもまた薬を塗ろうね」

能代はペニスをじっくりと見ながら冷静に言った。自分だけが興奮しているということが恥ずかしくて、さらにその羞恥心が興奮を煽るといふ悪循環。

「おちんちん、毎日射精するのが癖になっちゃっ

てるよね。こんなに痛いのに……かわいいそうに」

「能代さん……」

「薬で無理矢理連続射精を教え込まれて……。元気になったら痛くない射精を覚えようね」

くくく

「体調のいい時に、牛さんの生活をしてみない？」

「え……牛の生活、ですか」

「そう。まあ俺が家にいる時だけにはなっちゃうけど、全部世話してあげる」

「あ……」

牛と聞くと、やはり精液を無理矢理搾られるところを想像してしまう。でも能代が相手だったら頑張れるだろうか――。

考えている間に、車が駐車場を出た。

「あの、牛の生活ってどんな感じですか」

一日中四つん這いで生活をして、時間になったら精液を搾られる……という繰り返しだろうか。

「そのままだよ。俺は歩斗くんにご飯をあげて、排泄の処理をして、一緒に遊んで……興奮するようならその処理もしてあげて、風呂に入れて」

「……飼いたいな感じですか」

牛っぽいのは興奮の処理くらいだろうか。

「まあ本物の犬だったら去勢しちゃうけどね」

サラリと言われて言葉を失った。でも本物の犬

ではないから能代が抜いてくれるということか。

(どうしよう……)

ドキドキする。能代はどんなふうにしてくれるのだろう。仕事の時のように四つん這いの歩斗のペニスを後ろの方に引っ張って淡々と吐き出させるのだろうか。

「——あ、もちろんそんなことはしないよ。歩斗くんは犬じゃなくて牛さんだから」

「え？ あ、は、はい」

安心すべきところなのに、少しだけドキドキしてしまった。だって去勢なんて——自分でもそのどこに興奮したのかはわからないけれど。

(搾られるくらいなら去勢された方がいいって思ってるのかな……)

でも二度と快樂を得られなくなるのは嫌だと思
う。

自分でも自分の感情がよくわからない。自分は
いったいどうしたいのだろう……。

「ごめん、怖かったね。大丈夫だよ。ちゃんとおち
んちゃんのお世話もしてあげるから」

運転中の能代は歩斗の心境には気付かなかつた
らしい。慌てた様子でフォローの言葉を投げてく
れる。

「怯えてたわけじゃないです」

「そう？」

「その……能代さんに処理してもらうところを想

像したっていうか」半分は嘘。けれど半分は本当。

「されたいと思ってくれた？」一瞬だけ能代が歩斗を見た。

「……はい」

恥ずかしい。でももう一週間も射精していないのだ。何度も勃起したのにその度に氷のうを当てられて苦しくて……でもやっと今日傷が治ったことを確認してもらえた。

「じゃあ帰ったらしてみようか」

「え」

「せっかくだから本当の牛さんの仕事を経験してみない？」

「本当の……？」

「そう。これまで歩斗くんがしてきたのは本来の牛さんの仕事——仕事っていうか、生活じゃなかったんだよ」

確かに、歩斗がこれまでのことを話すとみんなが信じられないという表情を浮かべていた。でもこういう行為が正しいものだったのかは誰一人言っていないかったような気がする。

「……はい」

「怖くないから、気楽にしてて」

能代の様子が嬉しそうで、どのような感じなのか尋ねることはできなかった。でも能代が怖くないというのだからきつと本当に少しも怖くないのだろう。

リビングのソファ。隣に座る能代の顔を見上げる。歩斗を見るその目は優しい。

「出勤したら最初にシャワー」

「はい」緊張する。

「お腹の中もきれいにして、しつぽをつける」

「はい」

順番は小山田がしていたのとまったく同じだ。結局何も変わらないのかもしれない、という暗い思いが胸に芽生え始める。

「じゃあ実際にやってみよう」

「よ、よろしくお願いします」無意識のうちに声が硬くなってしまう。

「……おいで」

「えっ……あ……」

抱き寄せられ、額が硬い胸に当たった。頭を抱き込まれ、後頭部を撫でられる。

「でも何より先にリラックスだよ」

「能代さん……」

「怖かったら途中でやめるから」

「……はい」

抱き上げられ、首にすがりつきながら洗面所に移動した。一枚ずつ丁寧に服を脱がされ、身震いをする。

新井は服を脱がなかった。濡れないよう靴下は脱いだけれど、袖とズボンをまくり上げるだけ。

「もし痛かったら言ってね」

「はい」

熱めのお湯を肩からゆっくりと掛けられて心地いい。

「乳首はまだ少し痛そうだね」

「……ちよっと」

擦り傷ではなくつねられた痕。もちろん乳輪と乳頭の変色はないけれど、その周りはまだ赤紫色のままなのでいじられたら痛いだろう。

「いいこ」

「え？」

「痛いってちゃんと言えた」

「あ……」

たったそれだけで褒めてくれるのか——。これまでは痛いと言えば怒られていたのに。

「他の場所は大丈夫かな」

痛い場所がないのが残念だった。それくらい能代の空気は優しくて温かい。

「平気です」

「よかった」

シャワーのお湯がお腹を通り過ぎ、陰部に当たった。少し期待したけれど、能代はそこには触れなかった。けれど全身を一通り流すと石鹸をつけた手がペニスを握る。

「アッ——」

「力を抜いていて」

「は、はいっ」

皮をむかれ、カリ首も丁寧に指で擦られる。傷はちゃんと治っているのが痛まない。でもそのせいで快感ばかりを拾ってしまう。

「んっ……はっ、あ……」

ペニスを洗い終わると、両手で陰囊を包まれた。優しく揉まれると睾丸が転がるような感覚にゾクゾクしてしまう。

「あっ、あ……あ、あっ……」

「気持ちいい？」

「はいっ、きもちっ、あっ」

「かわいい。こうやってシャワーのうちから少しずつ体を高めていくんだよ」

ペットペットペット スピンオフ —サンプル—

gooneone (う)ーわんわん)

2022/ 6/ 24

メール:gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @gooneone11